

『第二言語習得・教育の研究最前線 2007年版』発行にあたって

佐々木 嘉則

今年も『言語文化と日本語教育』の2007年増刊特集号として『第二言語習得・教育の研究最前線』シリーズの六冊目をお届けする。今回は『言語文化と日本語教育』の発行主体であるお茶の水女子大学日本言語文化学会の会員からの2本の投稿論文に加え、2本の講演録を収録している。

第1章「音声の習得と教育」には、河野俊之氏の講演録(「音声教育と日本語教育と第二言語習得研究」)を収めた。最近「習得研究を教育に活かす」という掛け声をよく耳にするが、河野氏はそこからさらに一步進めて「教育に役立つ習得研究とはどのようなものか」について突っ込んだ議論を加えている。音声教育のみならず他の様々な分野で習得研究を進めている研究者にとっても示唆に富む論考である。講演というジャンルの特性を活かし、大学院初年当時からの研究者としてのライフストーリーをたどりながら一連の研究プロジェクトを解説しているという点でも、これから研究の道に入ろうという若手にとって興味深い文献といえよう。

第2章「文法の習得」は大関浩美氏(「日本語の名詞修飾節の習得研究—SLA理論および日本語教育への貢献を考える—」)の講演録と、孫愛維氏のレビュー(「第二言語としての日本語の指示詞習得の研究概観—非現場指示の場合—」)を収録している。大関浩美氏の講演は、同氏の博士論文研究(2005年3月学位授与)およびそれ以降の一連のプロジェクトを含め、名詞修飾節研究の最先端の動向を詳しく紹介したものである。ことに「3.2.4 実験研究(Ozeki & Shirai 2007a)」と「5.1 日韓比較(Ozeki & Shirai 2007b)」は、この講演が日本語による初の紹介となる。奇しくも、大関氏もまたこの講演において「習得研究を教育に活かす」ということばの含意について考察し、「学習者言語を肯定的に捉え、言語習得をプロセスとして捉える」というSLA的な学習者観こそ第二言語習得論が教師に提供する最

も重要な洞察であるとしている。

一方、孫氏の論考は、指示詞に関するものとしては森塚(2003)、単(2005)に続き本シリーズ3本目であるが、非現場指示用法に焦点を絞って知見の詳細な整理をおこなったところにその特徴がある。同一のテーマであっても切り口をかえることによって様々なレビューが可能であることの実証例ともいえよう。

第3章「会話場面の言語使用」は張瑜珊氏のレビュー(「初対面会話における対人関係構築プロセスの研究概観—会話データからの研究を中心に—」)を収めた。初対面同士の会話がどのように進むかという、理論上のみならず実用上も興味深いテーマを扱っている。

なお、前号までの和文・英文要旨に加え、本号からはそれ以外の言語(特に著者の母語)の要旨を付することを可とした。孫・張の両氏がこれに応じて中国語による要旨を寄せている。これは、応用日本語学研究成果を広く世界の応用言語学界に伝えようという努力の一環である。本シリーズは主として日本語習得や日本語教育に関わる論題を扱うことが多いが、その結果としてそれ以外の言語を含むより普遍性の高い一般化や比較考察に至ることが珍しくない。こういった論考のエッセンスは言語科学界に広くフィードバックすることが望ましく、特に留学生にとっては自らの業績の概要を母語で記録に残すことが重要な貢献になると考えるからである。

追記

前号(2005年版)発行以降、峯布由紀・原みずほ(2002年版に論文を掲載)、石崎晶子(2003年版に論文を掲載)・田崎敦子(2005年版に論文を掲載)の4氏がめでたく博士号を取得した。これで、本シリーズへの投稿論文掲載者中21名が学位保持者となる。

これら既刊号の目次や要旨などの情報は以下のサ

イトで公開している。今後も随時更新を進める予定であるので、折に触れてアクセスしていただきたい。

謝辞

多忙をおして短期間の間に綿密な講評をお寄せくださった5名の査読協力者の先生方、企画編集上等の様々な助言をくださっている白井恭弘・徳永あかね・長友和彦の各氏に深く御礼申し上げます。編集事務局実行委員の孫愛維氏・張瑜珊氏(ともに本号に論文を掲載)には装丁企画・書式点検・校正などの実務に御活躍いただいた。前々号実行委員の向山陽子氏からも実務作業に関してさまざまな助言と技術指導・ノウハウ提供を含む御助力をいただいた。向山氏にはあわせて、経理・発送事務等の元締めとしてもこのプロジェクトを背後から支えていただいている。小林(寺沢)久美子・唐澤麻里・清水寿子の三氏には、発行作業にあたって御協力を仰いだ。また、本特集号を市販ルートに乗せるにあたって御協力いただいた凡人社の渡辺唯広氏と、今回も厳しいスケジュールの中、迅速に印刷製本作業を進めてくださった平河工業社の海東智紀氏にも感謝申し上げます。

たい。

なお、前号までと同様、本号の刊行も日本語習得・教育に関する研究のレビュー論文集編纂を目的とする長期プロジェクトの一環であり、このプロジェクトは文部科学省科学研究費補助金¹の助成を受けている。

注

1. 「第二言語としての日本語習得・教育に関する研究のレビュー」基盤研究(C)2005～2008年度 課題番号17520343 研究代表者 佐々木嘉則

参考文献

- 森塚千絵 (2003) 「日本語の指示詞コアとその習得研究の概観」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2003年版』(『言語文化と日本語教育』2003年11月増刊特集号) 51-76.
- 単娜 (2005) 「日本語の指示詞に関する」お茶の水女子大学日本言語文化学会(編)『第二言語習得・教育の研究最前線 2005年版』(『言語文化と日本語教育』2005年11月増刊特集号) 69-100.

『第二言語習得・教育の研究最前線』ホームページ
<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/saizensen/>

ささき よしのり／お茶の水女子大学